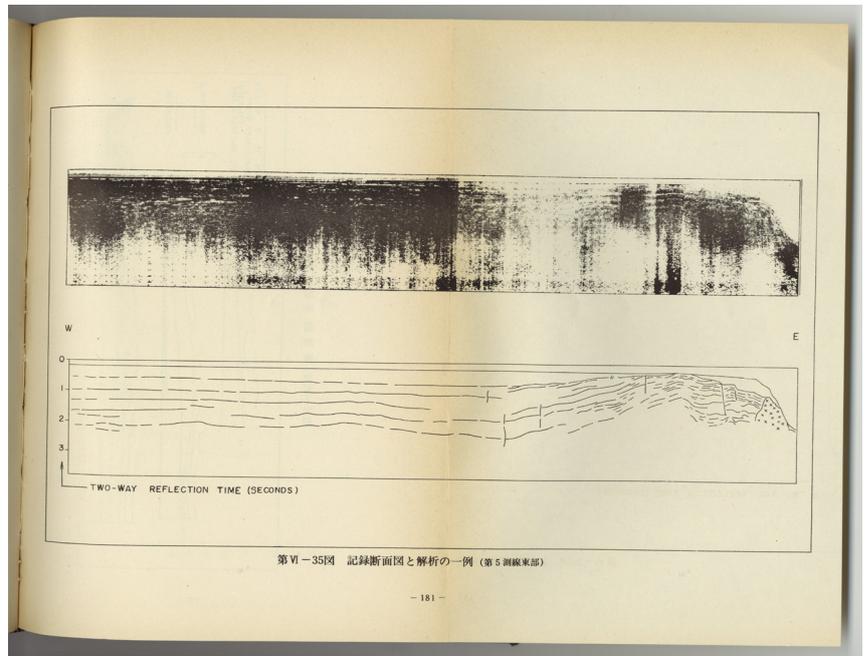
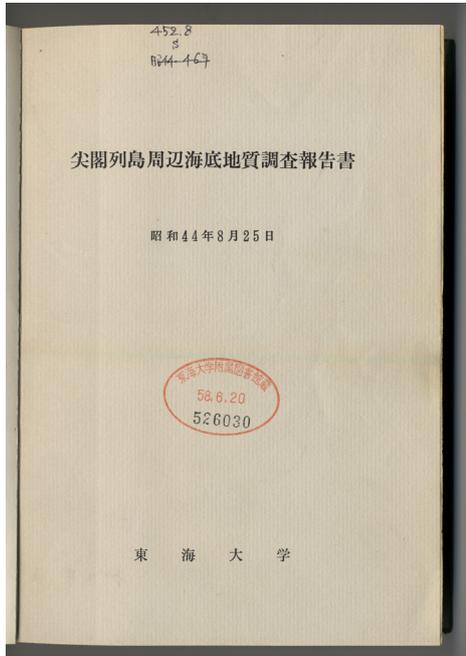


## 時代区分Ⅴ (2)-②旧総理府委託の尖閣諸島周辺海底地質調査報告書

## 3次に渡り実施の尖閣諸島周辺海底地質調査報告書

## No.73 尖閣列島周辺海底地質調査報告書

報H30/P27 1969年(昭和44年)8月25日



音波探査の記録断面図の例

所蔵: 東海大学付属図書館清水図書館

## 資料概要

1969年(昭和44年)6月27日から7月8日にかけて(尖閣諸島近海での現地調査期間)、東海大学(海洋学部)が尖閣諸島周辺海域で行った海底地質調査の報告書。前年(1968年(昭和43年))7月の高岡大輔による尖閣諸島の現地調査後の報告を受けて、旧総理府の委託により3次に渡って行われた。

一般海洋観測(気温、水温、塩分等)、海底地形調査、採泥およびサンプル分析による海底地質調査、地磁気観測、スパーカーを使用した音波探査による海底下の地質構造調査のほか、魚釣島及び大正島の岩石採集が行われた。

現地調査に先立っては、那覇港に入港した調査メンバー向けに日本政府主催のレセプションが開催された。これには、関係者として尖閣諸島4島(魚釣島、久場島、北小島、南小島)の所有者である古賀善次も招待されていた。

作成年月日 1969年(昭和44年)8月25日

編著者 東海大学

発行者 東海大学

収録誌 -

言語 日本語

媒体種別 紙

公開有無 有

所蔵機関 東海大学付属図書館清水図書館

利用方法 東海大学付属図書館清水図書館で閲覧を行う

## 内容見本

## VII 結語

尖閣列島周辺に海底鉱物資源の存在の可能性は極めて高いと云える。これは今回の調査成果の概査にもとづくもので、調査の各種の記録を綿密に解析したり、採集した岩石、砂礫、泥、貝殻等の精密な研究の結果を纏めることによってより正確な結論が得られるが、そのためにはなお多くの日時を要する。

スパーカー調査記録より、この海域の全面に亘って海底下2,000mを越える海成新第3紀層が堆積していることが推定され、所々に褶曲構造が見られ、また、新第3紀層の基盤と推測される岩体の存在する箇所も見られた。海底地形では、魚釣島と赤尾礁間距離約100キロの中間に、深い構状の地形の存在が確認された。石地(ママ)及び天然ガスの開発に関連深い新第3紀層の厚さについては、今回の調査で未だ不十分であるので、より深くまで到達する性能のエア・ガン等による地震探査を実施して、深部の地質構造を明確にする必要がある。また更に石油天然ガス等の資源の有無を確かめるため、5,000m内外の深度のボーリングを試みなければならない。また、尖閣列島周縁の学術調査を進めると共に近隣地域と如何する関連があるかという点も調査する必要がある。(略)

なお、今後の学術調査は前述のように、尖閣列島周辺にある大陸棚の海底地質調査に重点が置かれた(略)

音波探査：スーパーカーによる。  
 地磁気調査：プロトンマグネットメーターによる。  
 一般海洋観測：調査海域内の5地点の採水、測温等の観測  
 その他海象、気象観測等

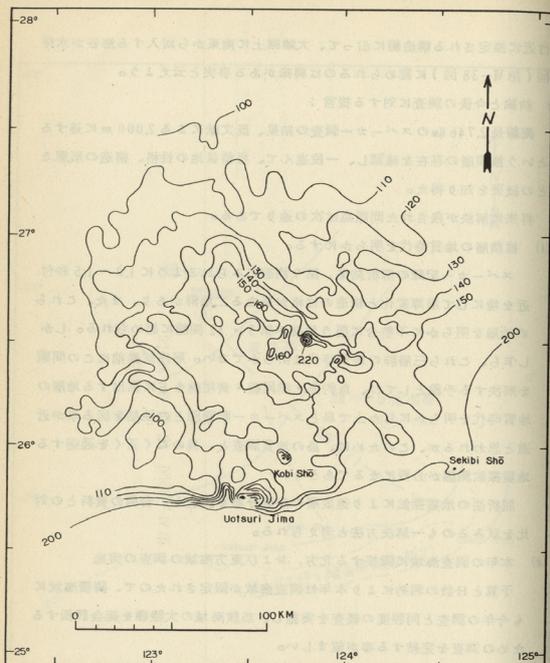
- 3 使用船舶  
 東海大学丸二世(702 G・T)
- 4 調査期間  
 昭和44年6月14日 清水出港  
 " 7月13日 清水入港
- 5 参加機関及び人員  
 本調査に自主的に参加を仰ぐ事が決定した。  
 東海大学海洋学部研究員 6名  
 " 学生 27名  
 石油開発公団事業本部 5名  
 琉球政府 2名  
 琉球大学 4名  
 顧問 1名  
 東海大学二世乗組員 26名  
 計 71名
- 6 調査海域  
 下記の日程により、調査準備及びスーパーカーの積装工事が完了した。  
 5月30日 東海大学丸二世入渠(金指造船所)  
 6月9日 工事完了  
 6月11日 各種計器テスト完了  
 6月12日 東海大学海洋学部校内会議室にて調査団会合紹介及び事務連絡が行なわれた。  
 準備完了した東海大学丸二世は6月14日予定通り清水港を出航した。

以後の調査航海は下記の通り、天候に恵まれ、その予定を無事完了した。  
 6月17日 那覇入港。夕刻、日本政府高瀬大使主催レセプションが東急ホテルにて下記の出席者を仰ぎ盛大に行なわれ、その盛大な壮途が関係方面の絶大な支援期待の中に祝福された。

- |              |           |
|--------------|-----------|
| 琉球政府副主席      | 知 念 朝 功   |
| " 通産局長       | 砂 川 恵 勝   |
| " 通産局工業開発課長  | 町 田 昇     |
| 琉球大学学長       | 池 原 貞 雄   |
|              | 古 賀 善 次   |
| 東海大学総長代理     | 岩 下 光 男   |
| 諮問委員会日本政府代表部 |           |
| 参 事 官        | 間 瀬 通 三   |
| "            | 村 田 幹 雄   |
| 調 査 官        | 佐々木正浩     |
| "            | 長 門 保 明   |
| "            | 島 田 治     |
| 外            | 2 名       |
| 日本政府沖縄事務所長   | 岸 昌       |
| " 次長         | 米 岡 日 出 徳 |
| " 通産係長       | 吉 川 智 昭   |
| " 渉外係長       | 岡 野 雄 浄   |
| 尖閣列島調査団      | 団長以下全員    |

6月18日 調査団は、大使、琉球政府、日本政府沖縄事務所を始め、関係方面に調査のあいさつを行なった。

同日夕刻、東海大学丸二世船上において、関係機関を招待して公開及びパーティーが行なわれ、尾良主席を始め、前日の参加者の来船を仰ぎ、盛大に行なわれたが、参加者は50名の多きに達した。



第VI-38図 水深図(単位はm)

## Ⅶ 結 語

尖閣列島周辺に海底鉱物資源の存在の可能性は極めて高いと云える。これは今回の調査成果の概観にもとづくもので、調査の各種の記録を綿密に解析したり、採集した岩石、砂礫、泥、貝殻等の精密な研究の結果を纏めることによりより精確な結論が得られるが、そのためにはなお多くの日時を要する。

スーパーカー調査記録より、この海域の全面に亘って海底下2000mを越える海成新第3紀層が推積していることが推定され、所々に褶曲構造が見られ、また、新第3紀層の基盤と推測される岩体の存在する箇所も見られた。海底地形では、魚釣島と赤尾礁間距離約100キロの中間に、深い溝状の地形の存在が確認された。石地及び天然ガスの開発に関連深い新第3紀層の厚さについては、今回の調査で未だ不十分であるので、より深くまで到達する性能のエア・ガン等による地震探査を実施して、深部の地質構造を明確にする必要がある。また更に石油天然ガス等の資源の有無を確めるため、5,000m内外の深度のボーリングを試みなければならない。また、尖閣列島周縁の学術調査を進めると共に近隣地域と如何する関連があるかという点も調査する必要がある。換言すれば、九州西部沖合の男女列島周辺との間の海底地質及び台湾西部沖合までの海底地質を調査して地質構造の上で如何なる関連があるかを確めるべきであろう。

因みに、男女列島周辺の海底地質については既に或る程度の調査がなされているが、台湾西部沖合については全く未知である。

斯の如く学術調査を積み重ねた上で、それを基礎として石油、及至天然ガスの開発を企業化すべきであり、海洋開発の発展は科学技術の向上に待たねばならない。即ち今回の学術調査を第1次として、第2次、第3次と綿密な年次計画を立て学術調査を続行すべきである。

なお、今次の学術調査は前述のように、尖閣列島周辺にある大陸棚の海底地質調査に重点が置かれたが、この海底地質の調査と共にこの海域を通過する黒